



説教要旨 「驚くべき恵み」

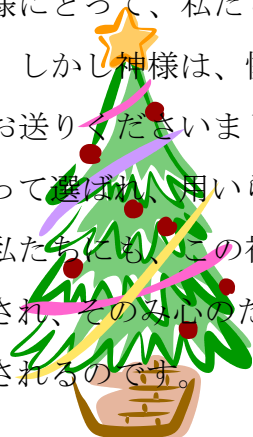
ルカによる福音書1章46～56節

マリアにはなにか、優れた才能や資質を特別に持っていたわけではありません。それどころか貧しく、身分の低い、誇れるものなど何も持っていない少女でした。けれども神さまはそんな何も持っていない、だからこそ神様により頼むしか出来ない、この一人の少女に目を止められたのです。何の取り柄もない、無価値だと思われたいたものこそが、神様にとっては重要な、かけがえのない存在であることが示されるのです。神様は、小さな私たちに目を止め、「わたしの目にはあなたは価高く、尊い」（イザヤ 43:3）語りかけてくださり、その救いの計画のために用いてくださるのです。

自分が大きいと思い上がる者ではなく、自分が小さい者であることを知っている者をこそ、神様は目を止め、御業のために用いてくださったのです。自分の力で、何かを成し遂げることができると思い上がる者ではなくて、マリアのように、自分が貧しい取るに足りない者であることを受け入れ、自分の力では何も出来ないことを知っており、それゆえに神様により頼む者を、神様を必要としてくださるのです。自分を小さくして、神様をこそ大きくする、それが「私の魂は主をあがめ」ということです。主がみ腕で力を振るわれる時に私たちはまさに、自分を大きくする者から、神様をこそ大きくする者へと作り変えられるのです。その時にこそ私たちは「幸いな者」とされるのです。

ただ神様のみにより頼み、神様の憐れみにすがって生かされる者となること。それが私たちが悔い改めるによって与えられる姿です。“憐れみ”は、はっきりとした上下関係です。私たちには到底手が届かない、はるか高みにおられる神様にとって、私たちのことなど本来取るに足らない、些末事でしかないのです。しかし神様は、憐れみによって独り子であるイエス・キリストをこの地上にお送りくださいました。マリアは、この神様の御業のために、ただ憐れみによって選ばれ、用いられたのです。そこに彼女の幸いがありました。

私たちにもこの神様の憐れみは向けられています。この神様の憐れみに生かされ、そのみ心のために用いられていくことによって、私たちも「幸いな者」とされるのです。



(2018・12・9 説教者：稲垣真実)